

の『傳統主義』は高島に於いて百も承知之助、試みにムツソリーニに關する雑多の拙文を見よなどと失禮なことは言はぬが、そんなことは討論終決の問題として彼れが『皇室中心主義』でないから『ない』といふに何の不思議があるか。

X

福士君の混眞的頭腦に於いては或は傳統主義と皇室中心主義とが同義異語であるかも知れない。けれども、當のムツソリーニはイタリア人ですよ、日本人ぢやありませんよ、どうか混同しないやうにして呉れ給へ。

日本人の傳統主義は直接に皇室中心主義に一致する。それは『万世一系』の『天皇』を戴く事實と、この事實に對する『認識』とに於いてである。君民一致の天孫人種は、豊葦原の記憶を思ひ出すことに依つて皇室の尊重を倍加するが、イタリア人に取つては古代ローマへの『憧憬』が直にサルヂニヤ王家に對する『忠節』となつて反映すべく餘りに相關性も必然性も稀薄

でなければならぬ。けだしローマの建設は紀元前七五〇年といはれ、選舉王政時代から執政共和時代となり、オクタヴィアヌスの帝政が確立してからも東西の兩國に分れ、その後の興亡盛衰は、さすがの福士君だつて中學時代に教はつたことと思ふ。現王室の始祖カロロ・アルベルトがイタリア北部の小王となつたのが一八四〇年代、その子のビクトリオ・エンマヌエルが周圍の王公國を攻略し曲りなりにも統一事業を果して『イタリア國王』の尊號を得たのが一八六一年今を去る僅六十六年前の話ではないか。のみならず、當時のローマはベネチヤと共にサルヂニヤ王國の支配圏外にあり、普佛戦争のドサクサ紛に火事泥をきめ得たのが一八七〇年、それ迄サルヂニヤ王權とローマ法權とは絶えず反目抗争を續けて來たのであつた。

X

加特力教の傳統は、如何にも燦然と輝いてゐるであらう。それに對するムツソリーニの憧憬も、なるほど本當であるに違ひない。だが、それだからどうして、サルヂニヤ王家への

「中心主義」に結果しなければならぬのであるか。法權に對して最後まで敵對した現王室には、寧ろ「不中心主義」であつてこそ論理の當然ではないか。君の用句を逆用すれば、ムツソリーニが「皇室中心主義者」でないと言ひ得るのは、彼れの傳統主義者であることを知つて始めて言ひ得るのだ。「七ツ丘」の光榮を力説するムツソリーニは、よろしく三千年の昔に選つて「共和主義者」たるべし。六十年の昔に止まつて「皇室中心主義者」たるべきではない。とはいふものの、僕は決して、ムツソリーニが現王室への忠誠を誓つたのを「不當」とするのではない。寧ろフアスシオが、卒先して王室への忠誠を披瀝したのは、やがて皇室を生活の中心として一絲不亂に結束する「日本」に追隨せんがための下心とも解せられ、極大な理想の程を頼母しくさへ思つてゐる。あれだけの獨裁的勢力を揮ひ得れば、名實とも「國民の王」となりたがり易いところを、我れみづから王室への忠誠を示し、以て國民的信仰の對象たらしめんとする態度は、なかなか得やすからざる政治家的才腕だと思つてゐる。

だが、それとこれとは別問題、彼れが「若し熱烈と評し得べくんば寧ろ却つて共和主義者」だつたことに間違ひなく、その最初が「便宜的手段としての皇室(王室)の存在を肯定」した事實も變りはない。福士君は何を證據に、彼れが生れ落ちての「皇室中心主義」者だつたと断定するのか。獨り合點の「買ひ冠り」を金科玉條に「利いた風な毒舌を吐くのが落ち」となつて貰ひたくない。

X

ムツソリーニは明白に熱烈な共和主義者であつた。どれほど「熱烈」だつたかといふに、國王が名もなき無政府黨の一青年に狙撃されたとき、當時の社會黨首領ボノミ(後に首相)が御見舞のため伺候したのを怪しからんといつて痛撃し、ボノミ除名の動議提出者となつたに見ても知られる。これは一九二二年の話だが、その後も「教會の財産没收」と「共和國の建設」とは、暫らくムツソリーニ一派の二大看板として公然掲揚されてゐた。看板としての「共和國

の建設」が下されたのは一九一九年、フラスシオの運動が産聲を擧げた年であるが、その當時に於いても『教會の財産没收』は幾多の社會主義的政策と併列して掲げられ、福士君の引用したる『……の傳統は加特力教によつて代表されてゐる』などとは未だ言はなかつた。

『我等の主張は簡單なり、我等はイタリアを統治せんと欲す』といふ傍若無人の宣言を發し一九二二年十月、光榮あるローマ進軍を開始せる時ですら國王がフラスシオ攻撃の許可をフアクタ内閣に與へた際は、彼れムツソリーニも露骨に不快な氣色を示したといはれる。幸か不幸か、フアクタ内閣の無力はフラスシオの猛威に對抗し得べくも見え、軍隊も悉くこれに投ずるといふ状態であつたから、國王もつひに『政府の戒嚴令を認めざる』旨を仰せ出され、次でムツソリーニの代表デ・ベツチに對し『戒嚴令を下したことは自己の本意でなかつた』と釋明せられたのである。國王がムツソリーニを『親愛なる甥』と呼ばれるやうになつたのは、斯うした経緯があつてから後のことに屬する。

X

『我黨は王室維持に賛成であつた。その運動の主眼は、自由の施設を擁護し軍隊を鼓舞してイタリアの國威を發揚せんとするにある……』といふ當時のムツソリーニの示威演説を見れば、嘗ての主義者時代は敢て問はず、黒襦衣を着たての頃でさへ、福士君の謂はゆる『皇室中心主義』は甚だ浮動的であつたことが知られる。少くとも最初は、便宜的であつたといふのが真相である。

然しこの事實は、少しもムツソリーニの不名譽を意味するものではない。若しムツソリーニが日本人であつたら、骨を割き肉を喰つても飽きたらぬ不逞漢だが、悲しい哉、彼れはイタリア人として生れたのである。三千年來の傳統に渴仰する心理と、六十年來の王室を尊重する念慮とは、彼れ（のみならず全イタリア人）に於いて共一では有り得ない。それが『愛國』主義者となり得ても容易に『忠君』主義者となり得なかつた悲哀である。是非善惡の批評

を日本人的常識に於いて下すことそれ自體が、全くの場所錯誤でなければならぬ。

福士君の頭の悪さは、イタリヤ人ムツソリーニを直に日本人ムツソリーニと混同したのみならず、日本人高島素之までその亞流であるかに混同してゐる。それは假りに我慢するとしても、ムツソリーニが『皇室中心主義』でないと指摘した高島が、暗に『皇室不中心主義』であるかに諷した一事は、全く以て聞き棄てならぬ輕妄である。馬鹿も休み休み言へ。

X

大體、先達ての拙文が、ムツソリーニの『不埒』を攻撃したと思ふ福士君の頭は、餘程ゼンマイの巻き方が足りない證據である。皮肉や洒落の解説をするほど、それほど間の抜けたことはないが、痛くもない腹を探られるのが癢だから福士君に後學のための説明を加へて上げよう。

『皇室』といふ傳統的觀念は、君民一如の歴史的三千年を經過した日本人のみが、單り始め

て独占し得る光榮でなければならぬ。我等は深くもそれを誇りとするだけ、輕卒にムツソリーニが『皇室中心主義』などと言はれると、甚だ不快を覺えるのである。映畫『ムツソリーニ』に於いて、明白な共和主義者だつた彼れが、生れながらの日本的『皇室中心主義』者らしく吹聴されてゐるに對し、僕は内心多大の憤悶の情を隠し得なかつた。如何にも空々しく、恰も彼れが『万世一系主義者』だと言はれてゐるやうな氣がして心から底から『戲談』ぢやないかと痛嘆したことであつた。辯士の無恥と無智とに對する當時の憤慨をあの一文中に壓縮して餘情を汲んで貰はうと思つたところが、福士君の如き頓狂な男が『知つたか振り』で飛び出し時代と場所の錯誤を盡した言ひ掛かりをつけるので、持つたが病の癩癩玉をつひ破裂させる結果にもなつたのである。ムツソリーニを『万世一系主義者』と呼んだら、どうだ福士君、多少は君でもくすぐつたく思ふだらうが……

X

地方主義運動とやらは、仰せの如く傳統主義の一系であるかも知れない。然し『地方』の意味を『津輕』ばかりに限定せず、日本とイタリアの相違の場合にも適用して貰はぬと困る。日本の地方主義が『皇室中心主義』に要約される代りには、イタリアの地方主義がどう要約されるか位は豫め承知して置いて欲しい。ムツソリーニが『セツの丘』の光榮を説けばこそ、僕は僕の傳統主義的見地から、彼れが日本的な意味での『皇室中心主義者』——『万世一系主義者』でないか断じたに過ぎぬ。けだし、彼れに於いては、どういふ傳統主義的見地があつたにしろ、特にサルヂニヤ王室を中心としなければならぬ理由がないと同時に、日本語的『皇室中心主義』になり得ないからである。随つてムツソリーニが假りに『サルヂニヤ王室中心主義者』でなかつたとて、それがどうして彼れが『古代ローロの渴仰者』でなく、また『イタリア民族の……傳統觀念の下に生きて居』ない反證となるのか？

サルヂニヤ王家とイタリア國民との關係は、譬へていへば徳川公家に對する現在の日本國

民の感情に似たやうなものである。外形的には相違があるにしろ、本質的な相違はあるべき筈がない。福士君の暴論を以てしても、高島が『誰某は徳川公家中心主義者でない』と断定したところで、誰某は愚、高島までが、まさか『建國以來の淳風美俗を破壊する』とは言ひ得ないであらう。ムツソリーニの場合も全く同断、浪花の葦が伊勢の濱荻となつても苦情の餘地があるまい。即ち『皇室中心主義』であつても、決して『皇室中心主義』では有り得ないのである。

X

問題が問題なだけ、ちよつと四五枚と思つたのが意外に長びいた。それもこれも福士君が高島の國家社會主義を妙に絡んで來たからである。福士君や蟻川新あたりから、勘ちがひの『同志』扱ひを受けないで済むのは有りがたい仕合せだが、高島が『愛國的』でないらしく誣妄した一事に對しては、名譽にかけ断乎として取消しを要求する。『下位春吉氏を暗にブローカ

「扱ひ」するのが『暴状』なら、福士君の無責任な放言は抑もどうなるのであるか？
大體、この文句からして福士君の言ひ掛りだ。僕が若し『白虎隊の石碑でイクラ儲けた』とでも言つたなら、而して若しそれが事實無根であつたなら、信心がらの福士君が鱈の頭の尊嚴を如何に呼稱しようとする勝手だが、單なる比喻を楯に『身の程知らず』などは片腹いたい。
が、それもよしこれもよし、降りかかる火の子なら『下位春吉』を『ブローカー』とも呼ばうぢやないか。ムツソリーニの兄弟分らしく吹聴し、故國への『賣り込み』を忘れないところは鞘取りをしたせぬに拘らず、これをブローカーと呼ぶのは當今の常識である。随つて、福士君の如く僕を『ムツソリーニ運動の別家』と思ひ込み、それで原稿料に有りついてゐると信じて下さるなら、僕自身がブローカーと呼ばれることも敢て苦痛としない。事實の眞否は兎に角、寧ろ大いに光榮と心得るかも知れぬ。下位春吉といふ人は、少くとも僕よりはブローカー的だらうぢやないか。

最後に、これは蛇足だが、僕はマルキシズムを正動思想と心得た覚えもなし、また『マルクスの國家觀念』をそのまま僕の國家社會主義に適用した覚えもない。事實は寧ろこれに正反してゐる。それ故にこそ、世人の謂はゆる反動的立場を僕の謂はゆる正動的立場として固持して來たつもりでもある。尤もそんなことは、福士君あたりに解つて貰へる望みもなし、また解つて貰ひたいとも考へぬが、打ち明ければそんなところ、そこが『蛇足』の名に恥ぬ所でもある。だが、今後とも、これ以上の『蛇足』には亘らぬつもり故、福士君のみならず御安心あれ。

秀 一 氏 著 書 目 録

◇私 <small>はこう</small> 眞宗信者 <small>になり</small>	◇親鸞 <small>は</small> エライ奴 <small>とは</small>	◇青 年 と 宗 教	◇婦 人 と 宗 教	◇凡夫と如來の同化問題	◇信 仰 と 難 波 大 助	◇大谷光瑞氏 <small>に自決を勸告して本願寺の</small> 改革 <small>に及ぶ</small>	◇私 <small>はかく</small> 阿彌陀佛 <small>を信ずる</small>	◇野依秀一氏信仰縱横録	◇慈 悲 の 彼 方 へ <small>(近刊)</small>
送料價 二十二錢	送料價 二十二錢	送料價 二十錢	送料價 二十錢	送料價 二十錢	送料價 二十錢	送料價 二十錢	送料價 六圓	送料價 二圓五十錢	

大 日 本 眞 宗 宣 傳 協 會

野 依

實業界之世界社
佛敎思想主
眞宗之世界主
日刊實業通信主

◇絶對の慈悲に浴して <small>正篇</small>	◇我が赤裸々記 <small>續篇</small>	◇信仰問題の解決	◇勇壯活潑の信仰	◇庄松上人と私の信仰	◇庄松と秀一の信仰	◇婦人の救はるる道	◇救濟の實在	◇宗教と社會主義と <small>資本主義</small>	◇我等は皇室と國家 <small>を如何に見るか</small>
送料價 各二圓五十錢	送料價 各二圓五十錢	送料價 二圓二十錢	送料價 一圓八十錢	送料價 六圓	送料價 六圓	送料價 四圓八十錢	送料價 四圓八十錢	送料價 四圓三十錢	發賣禁止

發 行 所 東 京 芝 區 愛 宕 町 三 番 二 號 振 替 五 九 三 七 番

野依秀一著

四六版特製・四百三十頁

定價金一圓九十錢（送料十八錢）

我が赤裸々記

自傳

ルツソーの

懺悔録にも

比すべき、

一大自叙傳

著者の無遠慮と卒直とはすでに定評がある。氏は今その鋭鋒を自己の上に向け最も赤裸々に最も露骨に自己の半生を語つたものが本書である。著者の波瀾万丈の経歴は最も異つた色彩に満ちてゐる。この経歴に即して現實社會の真相を暴露し、社會の本體を語ると共に、人間性の表裏を解剖してあます處がない。日本第一の活動青年の記録、最も眞人間の記録、眞實、赤裸々なること正にルツソーの自叙傳にも比すべきものがある。文章の卒直にして流暢なること又著者獨特の味ひ以て讀者に迫るものがある。本書の出版に際し社會各方面數十名士から寄せられた序文百五十餘頁は、著者野依秀一を評し盡し、その全人格を觀つくして餘す處なく興味多大なるものがある。人間の「眞」を掴まんとする者は一讀せよ。









